

鎌倉近代史資料第六集

鎌倉の俳人

江戸く明治

鎌倉市教育委員会
鎌倉市中央図書館

正 誤 表

訂正箇所	誤	正
目次	あとがき……57	あとがき… <u>56</u>
6 P 下段 6 行目	蕉門を <u>ただ</u> け	蕉門を <u>樹</u> てただ <u>け</u>

鎌倉近代史資料第六集

鎌倉の俳人

江戸く明治

鎌倉市中央図書館

はじめに

このたび、鎌倉近代史資料第六集「鎌倉の俳人 江戸（明治）」を出版するはこびとなりました。

この資料は、当館の近代史資料収集前嘱託員の木村彦三郎氏により調査・研究されたものを報告書としてまとめたものであります。

同氏は、昭和五十二年より中央図書館に専門嘱託員として勤務し、それ以後十四年にわたり鎌倉近代に関する資料の調査・収集にあたり、平成三年三月をもって退職いたしました。

その間、私たちにのこしてくださったものは計り知れないものがあり、それらは、資料といった有形のものばかりでなく、常に庶民の生活に視点をおいた郷土の見方や知識など、多くの人たちに多大な影響をあたえました。

永年にわたるご努力に深く感謝し、敬意を表するものであります。

最近、郷土および郷土史に関心をお持ちの方々も多く、特に鎌倉ではこの方面の研究が盛んであり、大変喜ばしいことでもあります。

今回の刊行にあたり、この資料が多くの市民の皆様方に愛読され、ご研究に少しでもお役に立てば幸いです。

なお、この「近代史資料」の刊行は、当図書館の重要な事業の一つとして、今後も継続していく所存であります。

平成三年四月

まえがき

江戸時代の一七世紀後半から明治時代二十世紀初までの、鎌倉の俳人に関して、有名、無名にかかわらず、目についたものはここに紹介することにした。

江戸時代は天保十四年以後地元の俳人の活動はなく、明治時代に入って、明治九年にはじめて地元の俳人が活動するまで、空白の期間が続いた。

幕末の激動時代が終って、新政府は成立してもなお不安定な状況が続いていた。

その間地元の俳人たちは目立った動きもなく、僅かに作品を個人的な日誌などに書きとどめておく程度だった。

明治九年に橋樹社の献額句会が催され、寄せられた選句刷り物に、鎌倉の俳人数名があるのが、私の明治に入っの初見であった。その後続々と地元俳人の活動が目立ったが、その多くは江戸時代末に活躍した人々だった。明治も中頃から新しい顔が現われ、新旧世代の交代もはつきりするようになったが、しかし地元俳人たちは旧套を脱せず、正岡子規の新しい傾向の俳句のことは、はるかに遠い声だった。

一九九一年四月

編集者 木村彦三郎

目次

まえがき

鎌倉の俳人（江戸時代） 1

鎌倉の俳人（明治時代） 38

あとがき 57

鎌倉の俳人（江戸時代）

芭蕉と風虎、露沾、幻吁

松尾芭蕉が江戸に出て来たのは一六七二年（寛文十二）二十九歳の春だった。俳壇の主流貞門派に属して俳諧の修行中で、江戸の貞門の先輩に交じって俳諧にいそしみながらも、まだその道で生活を支えるまでに至っていないため、昼は小石川の水道工事について働いていたといわれる。松尾宗房時代だった。

その頃貞門の俳諧師がよく出入する大名内藤風虎の江戸邸に、宗房も仲間連れられて出入するようになった。内藤風虎は磐城平の城主で七万石を領していた内藤右京大夫義概（後に義泰）の俳号で、風虎は風流大名でいられていた。

一六五七年（延宝三）内藤風虎に招かれて大坂から俳諧師西山宗因が風虎の江戸邸に滞在することになった。

宗因は貞門派の俳諧に批判的で、新に談林派と称され

る傾向を樹立している大宗匠だった。宗房も風虎邸に滞在中の宗因を中心に百韻興行を行い、名も桃青と改め、江戸の俳諧師として歩みはじめるようになった。貞門から談林へと作風も変って行き、弟子に宝井其角、服部嵐雪らが入門、一六七九年（延宝七）には宗匠就任披露の「百句興行」をおこない、翌年には「桃青門弟廿歌仙」を刊行、この年の冬深川の草庵に入った。

一六八二年（天和二）三月俳号を芭蕉と改めた。この頃には弟子、門人二千とも三千ともいわれる大宗匠となっていた。三十九歳。江戸に出席して十年目になる。

この年十二月二十八日、駒込の大円寺から出火した火事は大火となり深川の芭蕉庵も類焼、芭蕉は身一つで逃れて甲州谷村の門人に身を寄せた。弟子、門人たちの手で芭蕉庵の再建がすすめられた。

このとき第一の高弟宝井其角は、自らの学問の師であった鎌倉五山第二位円覚寺の百六十四世住持大願凡千和尚（俳号幻吁）に吉凶の卦をたててもらったことを「芭蕉終焉記」に記している。

芭蕉庵が再興して芭蕉は翌年五月に再び庵に入った。

一六八五年（貞享二）芭蕉は江戸を立てて関西の旅に

出た。その旅の途中で、伊豆韭山から来て同行した僧から、大願和尚の死を告げられ、その悲しみを江戸の其角の許に報ずる中に一句「梅こひて卯花拝むなミタ哉」と献じた。

内藤露沾は風虎・義概の次男で下野守政栄。兄が夭折したため家を嗣ぐべきだったが、義概の家臣で政栄を讒するものがあつて二十八歳で幽閉の身となり江戸六本木邸に入った。早くから父の俳諧へ傾倒の影響をうけ、六本木邸に俳諧師を出入させ、俳諧にはげんだ。

芭蕉をはじめ門下の俳人も六本木邸の俳諧、連句の会に連なっていた。談林派で重んじられ、水間沾徳のような江戸俳壇の重鎮となった門人も出し、後世江戸派露沾系の始祖となった。

前記三人はいずれも鎌倉と深いかかわりを持ち、この時期に鎌倉では地元から俳人が出ていないが、少し詳しく鎌倉との関係と作品の一端を紹介しておく。

内藤風虎

内藤家の六代目当主。磐城平城主で七万石の領主になったのは五代目忠興で、風虎・義概はその封を嗣いだ。

忠興のときにそれまで江戸靈岸寺にあった墓所を、鎌倉材木座村の浄土宗総本山光明寺境内に移して檀家となり寺領に五十石を寄進した。

一六七四年（延宝二）忠興が歿して、義概が家督をつぐと光明寺に更に百五十石を加増し合せて二百石の寺領（三浦郡柏原村・現在の逗子市の一部）を寄進、ついで翌三年には、鎌倉時代の絵巻「当麻曼茶羅縁起絵巻」二巻を寄贈した。いま光明寺に伝る国宝「当麻曼茶羅縁起絵巻」二巻がそれで、絵巻を納めた箱の蓋裏には「相州鎌倉天照山光明寺珍藏当麻曼茶羅二巻・伝前撰政大臣藤原良経公後京極殿真翰図、画工土佐将監、延宝三之秋大檀越内藤左京亮從五位下義概、以披誦之次更加脩飾令寄附畢 現住四拾六世貴誉萬量天爾」の文字が記されている。

風虎は俳諧だけでなく和歌の道にも通じ、また奥州の地誌歴史を調べさせたりして「文学大名」の名に表れたような業績を残した。

その詳細はそれぞれの学者が研究、発表しているので省略する。歿年は一六八五年（貞享二）九月十九日で、行年六十七歳。

光明寺境内にある鎌倉市指定史蹟「内藤家墓地」内の西南隅にある大宝篋印塔が、風虎の墓塔で次の銘文が刻まれてある。

「花鈴院殿薰蓮社芳誉雪桜風山」 「貞享二乙丑九月十九日」

「奥州磐城平城主左京大夫義泰と改まったのは晩年のことである。

岩波の「古典文学大系」『俳文俳諧集』から風虎の作品の一部をえらんでみた。

春日野や今幾日あらば薪能（詞林金玉集）

かろき水におもらぬあしや月の舟（桜川）

寒声や名乗をしつつたが子供（六百番俳諧発句集）

世の中やわたりくらべて四十から（続虚栗）

鳳凰か今朝鳥が啼く吾妻の春（江戸弁慶）

幻 吁（げんく）

大巖が円覚寺百六十四世住持になったのは一六七六年（延宝四）三月十五日、退山は一六八四年（貞享元年）

で在位は十年に満たない。退位してから、若い頃に住持をしていたことのある伊豆三津の浄因寺に入って、翌る

年の正月に入寂した、浄因寺と深いゆかりをもつ白隠禅師はこの年駿河の駿東郡原宿に生まれている。大巖は俳号を幻吁と称し、数少いが作品は蕉門七部集の「虚栗」「続虚栗」に採録されている。大巖に関しては芭蕉の「甲子吟行」（野ざらし紀行）や、芭蕉が其角に宛てた手紙、其角が叙した「芭蕉翁終焉記」「新山家」にも出ているが、近いところでは玉村竹二先生が「円覚寺史」のなかでくわしく述べていられるので、そのなかから一部を引用させてもらおう。

「（前文略）大巖は法流の上では、右の如く特異であり、住山の経歴もまた珍らしい。しかのみならず大いに文藻に富み、一方では漢詩文をよくし、従来の四六文作法を大成し『四六文章図』（六卷）を著作し、また一方では俳諧をよくし、有名な宝井其角の俳諧の上師である。其角の『新山家』（中略）に「円覚寺に入って開山仏光禅師を拝するに、所から常ならず、慈眼うるはしく、生る人にむかふがごとし、野鳥肩に馴れ、白竜袈裟に現すと伝えしか、在世のありさまをうつし、椅子に白き鳩二つとまり、袈裟に白竜をきざみたり。谷虚にして山おのずからこたへ、人無心にして、物よ

く感ずと、沢庵和尚の相山巡礼にかかせたまひける、殊更におぼゆ、

法の声空しき麤の堀かな 其角

常盤木の落葉見よとや鐘の銘 自悦

かたはらに梵千大願和尚の尊牌を礼し

香一爐はちすに銭を包けり 其角

彼和尚のいまそまかりける世をおもへば、開山より百六十三(四)世となり、十三にして業徳の名あめが下に擅に、一箇無心の境に遊で、詩は盛唐の威風を庄し、且つ俳諧に自然の妙を伝へ、予が手を牽て、鼓うち舞しめたまふよりそ、万たふとき御事を耳にふれ侍る。

貧は原子なり、多病杜子にひとし、貞享二年正月三(四)日いそち七とせにして、柴屋の雪の中に消へかくれ給ふ。

御名世に勝れ給へれば、葬喪し奉る事眼に富り、しかれども生前の一盃の麦湯にはしかじと、愚集みなし粟に、幻吁とどめたる御句をしたえば、涙いくばくぞや、

三日月の命あやなし闇の梅 其角

花洛に浜川自悦といふあり、東行の比にまみへて、かりそめながら、法のはしくれを得たり、予去年京にあ

りて、ともに寒山が笑をとけぬ、和尚の迁化を告たりけるに、おもひしのべとて、社のむかしの御句をとりかへして

法花になに黄泉の株ならん 自悦

(以下略)

大願和尚は美濃国に生れ、若くして武蔵国久喜の甘棠院の岫雲に多年師事し、ついで常陸の高岡法雲寺に入った。のち伊豆国駿東郡三津の淨因寺八世住持となった。

一六七六年(延宝四)鎌倉円覚寺百六十四世住持に進んだ。在位十年で退き再び伊豆淨因寺の住職となり一六八五年(貞享二)正月四日に五十七歳で寂し、境内山腹の歴代墓所に葬られた。

淨因寺は明治年間に火災にあつたため、大願に関する資料や寺に伝わる古い記録類も大部分失つたが、大願の位牌と自筆の推挙状他二、三点が保存されている。境内には先住岡崎宗澄師の発起により地元有志たちの志で、幻吁の句碑二基が建てられてある。幻吁の俳句は其角撰になる「虚栗」「統虚栗」にのつた次のものがある。

礼者敲門しだくらく花明かり (虚栗)

詠懐

我杖に秣かふべし花の山 (〃)

四家納涼

水枯て蟬を不断の滝の音 (〃)

雪夜

仏たく夜はさぞあらんそば湯哉 (〃)

心法其精口耳祖

蠅むしを打てともに生死を軽くせん (続虚栗)

終夜玉しいつかれければ

秋の夜は夢ばかり寢覚かな (〃)

内藤露沾

風虎・内藤義概の次男で政栄。一六五五年(明暦元)

五月一日江戸桜田の内藤家の江戸邸で生れ、一六七〇年(寛文十)従五位下野守に任ぜられた。兄が夭折したので、家封をつぐべきだったが家臣のうちから、父義概に讒するものがあり、義概の計らいで幽閉の身となった。

一六七八年(延宝六)のことで、一六八二年(天和二)二十八歳で退身して、江戸六本木の邸に入った。以来談林派の俳諧師を邸に入入りさせ、もっぱら俳諧の修業にはげみ、門弟の育成につとめた。芭蕉をはじめその門人

も親しく六本木邸の俳諧連句の会に参加していた。

内藤家は弟義孝が嗣いだが義孝に子がなかったので、

露沾の子豊松を嗣子にした。一六九五年(元禄八)に常陸高月で一万石を分けられて領主となった。さきに露沾を讒した家臣らが藩政に横暴な振舞が多いので、露沾は彼等を処断し、家中を安隠に治めるなどの治績もあげた。一七一二(正徳二)藩主義孝が死んで、豊松が封を襲いで能登守義覚となるや、露沾も碌高を増された。

藩内の政治にかかわりをもちながらも露沾の俳諧への修業はさかんで高弟の水間沾徳はじめ幾多のすぐれた門人が出て江戸俳壇の談林派の雄とされ、一門は江戸座と称されるまでに門葉をひろめた。

一七三三(享保十八)九月十四日七十九歳で歿し、遺体は一時磐城平の善昌寺に葬られたが、間もなく鎌倉材木座光明寺境内の内藤家歴代の墓所に移葬された。

内藤家墓所内の御霊屋跡と真向いの、南塀際に、父風虎の墓塔に等しい大宝篋印塔がつくられた。

墓塔の銘文は次の通り。

「光頭院殿野州刺史天誉露沾寛慈徹山大居士」「享保十八癸丑年九月十四日」「内藤下野守藤原朝臣義英」

露沾の作品は編著「のぼりつる」「倉の衆」などの他

談林や蕉門の句集などに多く見られ、内藤家には「露沾公詠草」二冊が所蔵されている由である。

作品の数は夥しいが、その中で「芭蕉七部集」と「虚栗」にある露沾の句をぬき出してみた。

梅咲て人の怒の悔もあり (猿蓑集四)

梅一木つれづれ草の姿かな (炭俵梅)

温石のあかるゝ夜半やはつ桜 (続猿蓑集下)

ものものの心根とはん月見哉 ()

一時雨またくづをるゝ日影哉 ()

星さえて江の鮒ひらむ落葉哉 ()

誰世にか治郎身投しかきつばた (虚栗)

川尽て鱒流るゝさくら哉 ()

鎌倉の僧こととはん冬の梅 (続虚栗)

前記三人のほかに、蕉門集の「千鳥掛」のなかに『鎌倉僧 暮船』の名で

岩ひばの握つめたるあつさかな
の一句があるが、作者の暮船を知る手がかりは全くない。

地元の俳人たち現れる

一六九四年(元禄七)十月十二日に松尾芭蕉が大坂で病歿、遺体は近江国栗津に送られて十四日に義仲寺に葬られた。行年五十一歳。

芭蕉は俳諧の一大宗匠で、貞門派から談林派へと俳諧の新しい道を求め、新に蕉門をただけでなく、俳諧の最高境地に達した。

芸術家であり、思想家でもあった。

俳諧に道を求めることは、俳諧にいそむ誰もが志すことで、芭蕉のような最高峰は、その下にいくつかの群峰を従え、さらにその群峰のふもと、それにつながる広野というものが当然あって、その高さが仰がれる。

俳諧のひろがりや芭蕉だけのものでなく、その時代の文化とつよいつながりをもつ。

芭蕉が新しい道を模索している一方では、貞門、談林の枠のなかで俳諧をひろめる役割をつとめる宗匠もふえていた。芭蕉の門人にもそれぞれの自分の力をいっばいにして、俳諧をひろげる人たちもいた。芭蕉の弟子がすべて芭蕉のように道を開く能力をそなえていたわけでない、ことは芭蕉が生前に書いた手紙にも示されている。

(前文略) 風雅之道筋、大かた世上三等に相見之候、点取に昼夜を尽し、勝負をあらそひ、道を見ずして走り廻るもの有。彼等風雅のうろたへものに似申候へ共、点者の妻子腹をふくらかし、店主の金箱を賑はし候へば、ひが事せんには増(まさ)りたるべし、又其身富貴にして、目に立慰は世上を憚り、人事いはんにはしかじと、日夜二巻三巻点取、勝ちたるものもほこらず、負けたるものもいからず、また一卷など、又とりかかり、線香五分の間に工夫をめぐらし、事終つて即点など興ずる事ども、偏に少年之よみがるたにひとし、されども料理を調べ、酒を飽迄にして、貧なるものをたすける点者を肥しむること、是又道之建立の一筋なるべきか。

又志をつとめ情をなぐさめ、あながちに他の是非をとらず、これより実の道にも入るべき器なりなど、はるか定家の骨をなぐり、西行の筋をたどり、楽天が腸をあらひ、杜子が方寸に入やから(輩)わずかに都鄙かぞへて十ヲの指ふさ(伏)ず。君も則此十ヲの指たるべし。能くつゝしみ御修行御奉存候(後略)―岩波文庫「芭蕉の手紙」元禄五年二月十八日、近江膳所藩中老職菅沼曲水宛。いわゆる「芭蕉翁風雅三等之文」である。

芭蕉歿後になると芭蕉の弟子のあいだに芭蕉の開いた道に対する評価をめぐって、それぞれの異見が出、蟹は己れの甲羅に任せて穴を掘る、と俗言のおしえるような状態になり、芭蕉の求めた道を正しく踏む人は少くなつた。芭蕉が手紙に示した他の道楽よりはまし、といった程度ではおさまらず、俳句をもじつた冠づけ、三笠づけなどという賭博まがいのことをする雑俳の宗匠も出て、幕府から法度の処置をうける有様にまで、氾濫した。

俳諧のみならず文化の大衆化による低俗化はさげがたい。

一七四三年(寛保三)芭蕉五十年忌を迎えて、芭蕉の求めた高雅な精神を守つて来た僅かの人々と、それに師事する人たちによって「芭蕉にかえれ」の声があがった。

谷口蕪村、大島蓼太らが出て低俗化した俳諧を、高めるための機をつくつて、中興期といわれる水準の高い俳人を出すようになった。

この中興期といわれる時期に鎌倉で、はじめて地元出身の俳人が一斉に活動をするようになった。地域別に逐つてみる。

寿 来 鎌 倉

末枯や空は棚引觸雲 (むさし野三歌仙)

作者は松下氏、宝曆十一年「御傘難問」を著して松永貞徳の「御傘」を批判している。

卓 二 大町

姓氏、生歿年を明かにできないが、飯田九一収集句集のなかに「卓二追悼集」があつて、鎌倉大町村の人で、一七七四年(安永四)に古瓦老人が序文をつけて刊行された、とあるのでこの期のもっとも早い句集ともいえる。

一八〇二年(延享二)に刊行された坂の下村の女流俳人安西仙鳥の追悼句集「卯の花くもり」に卓二の句がのつているところから、卓二の安永説が疑問視されている向もあるが、「卓二追悼句集」の現物を見ることができないので、明かにできない。

百千返り啼友集やほととぎす (卯の花くもり)

鯉くふて出れば松の月夜哉 (新俳諧五百題)

栗穉に咲まじりたる野菊哉 ()

〔新俳諧五百題は一八四五年(弘化二)田喜庵護物が編し刊行した二冊本〕

小坂米舎

米社とも書かれている。大町村祇園天王社の官主で。

小坂周防守漆部常郷の俳号で清舜庵を名乗っていた。

内藤露沾門の水間沾徳系、江戸座の八楽庵岡田米仲についたといわれる。坂ノ下村の安斎仙鳥女に俳諧の手ほどきをしたことで知られている。一七九七年(寛政九)には地元の俳人たちと江戸島稚児淵の崖上に、芭蕉句碑もたてている。一八一六年(文化十三)八月十六日歿、墓所は大町祇園山々麓の小坂家墓所内。雑誌「鎌倉」五二号に小坂昌美氏の「小坂米社」に関する詳しい紹介がある。

くたびれて余所のきぬたを聞夜哉 (的申集)

紫の雲路にゆかしほととぎす (卯の花くもり)

万歳や終に笑はぬ人迄も (歳旦帖)

上戸等も餅を食ふなり今朝の春 ()

時鳥鳴くや召さるゝ硯水 (舎笠集)

われ人も料戸の風はついで (県古俳人展)

梅暮るゝ門鳴子の蛇の殻 (ももの枯葉)

若竹やとまる雀もおない年 (句合)

大町村には他に二人の句が見られるが、いずれも姓氏、

生歿など明かでない。

扇山 大町

逝く水に是も手向や苔の花 (卯の花くもり)

祇園会や橋の上行く人の浪 (山ノ内祇園社掛額)

芳三 大町

傍に清き川音せり捨草履 (山ノ内祇園社掛額)

松尾百遊 雪ノ下

本名瀧右衛門、生歿は不明。鶴岡八幡宮寺の八乙女をつとめた山崎守王(俗名ソデ)に入夫し、別当寺院十二院の一つ等覚院の目代をつとめ、段葛の南側大路の東角で、旅亭「吾妻屋」を営んだりしていた。

俳諧は鎌倉郡下飯田村の露柱庵春鴻(箕口氏)に師事したといわれるが明かではない。地元では安斉仙鳥、小坂米舎らと交っていたらしいが、遺句は少ない。

酒井抱一が江ノ島を訪れた際(十八世紀末)吾妻屋に宿をとり、百遊と語り、翌日ともに江ノ島に参った。という話が伝えられている。

一七八二年(天明二)九月には、江戸の柏屋新七郎はか二人とともに、扇ヶ谷の刀匠五郎正宗屋敷跡に、正宗焼刃稻荷を建てた。

一七八八年(天明八)には、大町原けかち島(現在の由比ヶ浜一丁目)の六地藏脇に、芭蕉の句「夏草やつはものどもが夢のあと」を刻んだ句碑を建てた。

句碑の表面は

いてや、をりにふれてこころにおもふ事をいひ」出るはいつごろ□隔夏の高館覧古の詠をしるして、爰もふりにし夢の跡へ」石碑をたてる、是なん陸奥の吟はと忍ばん」より衆とともに先師の追慕にあたり」俱霊を弔んがためかかつは幸に」百遊の捨に、伝はりし我なからんあ」とのためにもと、ともにかたらざらめや

松尾百遊述

芭蕉翁
夏草や

つはものどもが

夢のあと

(碑裏)

天明八丙歳五月

(碑右側面)

此礼はたれにいふべき清水哉

東武独庵買明

この碑が建った天明八年より四年前の天明四年八月に、独庵買明は死亡している。その前年の天明三年が芭蕉の百回忌に当たっていたので、百遊はそれを機に、六地藏の塚に芭蕉句碑の建設を計画、江戸の買明に協力をたのんで一句を得ていたが、建設が意のままに進まないうちに、買明が此世を去り、以後四年目に句碑の建立がかなった、という事情が考えられる。

百遊は十二院の等覚院の目代をしていたことから、坂ノ下の安斉仙鳥家とはそちらの役目で出入りもあり、松尾瀧右衛門署名の証書類が安齊家にのこされている。

仙鳥との句友でもあり、歳旦帳や句合に仙鳥と名を連ねている。

墓所は扇ヶ谷浄光明寺の山崎家墓所内。

名月や鷺も見てゐる水の底 (句合)

一筆に花も咲けり楮出ぬ (歳旦帖)

函両は鶯に吞まれたる螢かな (卯の花くもり)

路原 雪ノ下

我宿の千歳を継ぐや門の松 (歳旦帖)

恵方から梅の香りも嘸や嘸 (〃〃)

月々の埃積るや大三十日 (〃〃)

一舟 雪ノ下

咲初て御代も豊かや福寿草 (歳旦帖)

鶯やまたしおらしき懐子 (〃〃)

家々に餅花咲や年のくれ (〃〃)

魂棚や不幸を侘る胸のうち (松原庵追悼)

二人とも姓名、生歿など明かでないが、百遊とともに、仙鳥を加えた歳旦帖に句をのせ、大磯嶋立庵の乙草庵西奴、江戸の雪中庵蓼太が句を寄せているところから、句の修行をつんでいた人たちかと思える。仙鳥の「卯の花くもり」には路原も一舟も名を出していない。

笑月 雪ノ下

聞からに影おしまるゝほととぎす (卯の花くもり)

祇園会や計りて見たき人埃り (山ノ内祇園社掛額)

英富 雪ノ下

五月雨の夜ン事に晴て法の月 (卯の花くもり)

硯寿 雪ノ下

卯の花に影をおとすやほととぎす (卯の花くもり)

左龍 雪ノ下

手向くるや里の井水にかきつばた (卯の花くもり)

何れも仙鳥の「卯の花くもり」に追悼句を寄せている人
たちであるが姓名、生歿など一切が不明。

涯邦 材木座

手向ばや谷ツ七郷の花卯木 (卯の花くもり)

羅の衣桁に近し秋の蟬 (県古俳人展)

吟風 材木座天照山内

元朝や鶴も羽をのす初日の出 (歳旦帖)

麗を初音ぞ告る梅ヶ枝 (〃)

年の尾やもう版手ほど古曆 (〃)

五靈 同前

名月の面をばうつつ初日の出 (歳旦帖)

梅ヶ香やはつ音を鳥の配り初め (〃)

蓬萊の山も見えたり年の坂 (〃)

鳳兮 同前

屠蘇かけて福といふ字で吞始 (歳旦帖)

野も山も化粧くらべや花の春 (〃)

嬰兒の心うらやむ年の暮 (〃)

揚止水 同前

はつ春の日の出も早し日本橋 (歳旦帖)

見る人も共に笑ふや梅の花 (〃)

月も日もわれとは行て年暮れぬ (〃)

涯邦を除いては何れも天照山とついでるので、光明
寺の僧か、檀林の寮にいた学僧か明かでないが、何れも
仙鳥らとの歳旦帖に句をのせている。

涯邦は仙鳥の追悼句集に追悼句を寄せているが、この
人も姓名、生歿などを含めて全く知れない。

嘉幸 扇ヶ谷

蚊遣火に先だつ香の手向かな (卯の花くもり)

元日や世に出立つの福寿草 (歳旦帖)

福引や雪は潤はず家子持 (〃〃)

徳は身を潤して実には汁粉かな (〃〃)

杉谷 長谷

頼むべき月や傾く夏の空 (卯の花くもり)

仙鳥、貞松、悦応、自尼らと歌仙「鯉鱗吟」一巻をま

いた中にも作品が見られる。

春潮 同前

何不足なき世なり散牡丹 (卯の花くもり)

祇園会や社頭に早きとまり鶏 (山ノ内祇園社掛額)

安齊仙鳥 坂ノ下

出身、俗名、生年は不祥。坂ノ下村の富農安齊三左衛

門に嫁したが、三十歳に至らないで三左衛門と死別、以

来寡婦として遺子を守り育て、家業をさかんにした女丈

夫。

安齊家は星の井戸の近く村の旧家で十七世紀はじめ頃の墓標も見られる。

仙鳥の頃には農のかたわら、醤油の醸造、回漕、金融にまで手をひろげていたようである。

俳句は大町村祇園天王社の神主小坂米舎に手ほどきをうけた。

その後は大磯の鴨立庵の乙草庵西奴に師事した。西奴は一七八四年(天明四)鴨立庵主土龍庵百明が歿したあとをついで庵主となり、一七九三年(寛政五)八月十二日に亡くなった。年代不明の端本の句合集と見られる木版ものに、西奴、大磯の丹人、鎌倉の米舎、百遊らと名をならべているので、この頃には相模俳壇で名を知られる存在になっていたと思える。

また年代不明の「歳旦、春興、歳暮」の刷り物には、雪中庵蓼太、西奴をはじめ鎌倉の米社、百遊ら十人の中に仙鳥がある。蓼太は一七八九(天明七)に歿しているので、これは天明年間のものとして推定できそうである。

西奴が亡くなったあとには橋本泰里に師事した。泰里は古来庵馬場存義(泰里)門で一七八二年(天明二)存義が歿したあと、二世存義・泰里について有無庵河上庵橋

本泰里を名のつた。仙鳥が無事庵を名のるようになったのはこの頃からと思える。泰里の姉は女流俳人古友尼松承庵・美松を号して、仙鳥と親しくしていた。追悼句前書に「去年の卯月仙鳥のうし、こなたへいたりたまひてともにうれしと語り侍のしに、此卯月は長き別れと成ぬることのいとかなく、只夢のやうに、たひめの折からの目に残り侍りて」として

悌のゆかし裕のうしろつき 古友

の一句を寄せている。

仙鳥は三十歳まえに夫三左衛門と死別、一子を育て成人させて家業を継がせ、三左衛門の名を継げたが短命で仙鳥に先立って世を去り、仙鳥は逆を見る運命になった。三左衛門の若い寡婦を扶けて家業をつづけさせていた。三左衛門の死は十八世紀の終りで、江戸で「御猪狩風」という風邪が流行した頃になる。

そして一八〇二年には世に「お七風」と称せられた風邪が江戸から鎌倉方面に流行し、仙鳥も三月のはじめこの風邪に冒された。四月になって症状が重くなって、日頃親しくしていた長谷甘繩神明の別当寺院甘繩院の住僧良性尼（一八二九年十一月九日歿）が二日に、卯の花を

一枝もって病床を訪れ、その一枝を枕もとに示したところ、それを眺めて、側にいるものに筆と紙を用意させて、

卯の花に聞そこなはじ時鳥

と一句を記した。その句が辭世の句となり四月六日にこの世を去った。死後間もない一八〇二年五月に、弟雪海の努力で、河上庵泰里のくわしい序文をつけ、生前親交のあった各地の俳人たちからの追悼句に、仙鳥の生前の作句から約百句をえらんで「卯の花くもり」と題して刊行した。この追悼句集に地元鎌倉から二十八人が句を寄せている。

「卯の花くもり」の他に、雪中庵大島蓼庵太、乙草庵西奴をはじめ、地元の俳人十余人の句をのせた「歳旦、春興、歳暮」、歌仙「鯉鱗吟」一巻もあり、その他にも句が散見されるので、仙鳥の俳諧への積極的な精神は、地元俳人では群を抜いている。

卯の花くもり

たき木こる鎌倉の里星の井

てふところに一婦人あり安斎氏

にしてむかしより農家なり

けらし三そちに足らずして夫に

おくれ其一のいとけなきより

いつき傳き育つる事としあり

紡績のいとまいとまにハ風雅をこのみ

はしめはいかひの難波津習ひしハ

同じ所大町の宮司小坂米社にそ有

ける夫よりして其名を仙鳥と呼び

花月に身をゆだねて其後鴨立沢の

乙艸庵西奴老人にしたかひもはら

此一筋を励ミ又乙艸庵物故の後ハ予か

門人と成ていとまめにほく附合をよく

あきらめ侍ぬ其いにしへ都より阿仏

尼公此かまくらに下り給ひしるよしの

訴ありしこといさよい日記に委し又

いつの頃にや有けむ若君為相卿いまた

おさなくておはしませしに尼公自

和歌の道をためし給んとて明り

障子をよミ入よと示し給ふふる事

ともいと有かたしはた夫より後

北条家五代に当て松下の禪尼

そおはしましけるある時時頼卿を招

き給はむとてみたちいときよらにし給ふ

中におましの障子を手つから切張

したまふ儉なる教今の世までもみな

人のしれる所なりおほけなきたとへ

なから仙鳥常に懸息を庭訓して

つるにひとくなり三左衛門とて其家を

相続し侍りきかたの如く孝心にして

朝夕つかふまつる事他にこえたり

しかハあれと短命にして母に先たち

身まかりぬたらちねの愁ひ思ひやるへし

それより三とせ四とせ立て此いやよひ

始の頃より鄙も都もをしなえて風病

はやりもて行中に仙鳥も病ひに

臥ぬ日々においらかに見ゆれとも
卯月のはしめ又俄にいたつき

あつしくなりしかはうからやから

つとひ寄て何の薬くれの療治

なとて打さわきぬこゝに甘繩

御越ヶ嶽の辺りに良性てふ尼あり

常に老婦と浮世の友なりけり卯月

二日かの尼病床を尋られけるにはや

うつゝ心にて我かのさまなればかハす

言葉もやくなし良性手つから

卯の花の一枝を家つとにして

見せけるか風雅のこゝろ正しかる

にや閉たる眼をひらきてかの一枝

を心よくうちながめ臥ながら筆に

紙添てよと有に側なるうまこかの

物をまいらせければ

卯の花に聞そこなはし時鳥

からうしてやうやうに書終りまた

もとのことくうつゝ心になりぬ是

をや辞世のすきミとも言へし

既に其六日正念にして往生の素

懷を逐早ぬ死に近づくまで風

雅をせちにおもハれけるこそ尊

けれおのれ去年の春たいめせし

まゝにて風のたよりにこの事聞

侍りかつおとろきかつなげきて

こたひ亡婦人の墓詣せんと

此星の井安斎に來り其辺り

の旧友たれかれにまミへ仙鳥

婦のむかしを語りぬ風流の

すきものなれば遠近の友とち

より手向の句々よせしを其

まゝに置んも本意なしと

米社梅豊などいへる老輩と

ともに梓にちりはめん事を

約して老のくりことをはしめに

かいつけ侍りぬ

河上庵 泰里

印 印

享和戊夏臯月

姉仙鳥身まかりけるに

卯の花の雪折かなし上つ枝

かはかなしな卯波の露の袖袂

姑の身まかり給ふかなしさに

はかなしや今墨染のころもかえ

日頃好み給ふ事などおもひ出て

袖の花につけて酒宴の噂かな

晨鐘とともに往生したまひければ

暁の鐘身にしむやほととぎす

任玉句到来順

今爰に夢かうつつか郭公

卯の花に滴こほれて手向哉

蚊遣り火に先たつ香の手向哉

百千返り啼友集やほととぎす

何不足なけれど世なり散牡丹

図両は鶺に吞まれたる蜚かな

五月雨の夜ノ事に晴て法の月

葉桜に蝶もわひしき眠りかな

手向るや星の井水にかきつばた

雪涛妻 ちち

坂の下 よね

よね

安利

安利

鳥秋

鳥秋

極楽寺邑 釈 鷲万

腰越 釈 小動

扇谷 嘉幸

大町 卓二

長谷 春潮

雪下 百遊

大蔵 英富

雪下 江風

全 左龍

卯の花に影を隠すやほととぎす

聞からに影惜しまるゝほととぎす

手向はや谷ツ七郷の花卯の木

頼むへき月や傾く夏の空

来る年も爰なわすれそ時鳥

卯の花や垣根はかり日が暮残り

逝水に是も手向や苔の花

全

寂る身の甘庶は照らせ夜半の月

入る月の影まほろしや子規

佛の筆に残りて閑古鳥

汐に入る月幻の卯の垣根

散て行花のはまれや花御堂

卯の花や薄曇りぬる星月夜

卯のはなや入日の後の窓明り

全

残りをの人やおもへは夏の月

文台に其佛や衣かえ

全 硯寿

全 笑月

材木座 涯邦

長谷 杉谷

小坪 海市

重富

大町 扇山

岩瀬 釈鏡水

山ノ内 了々

全 午睡

全 都良

岩瀬 谷鳥

栗船 古登

本郷 素国

藤沢 千珏

全 曾登

南無阿弥陀仏の国の懺涼し
聞や否や十萬億土ほととぎす
人並に惜むか塚の蟬の声

全 素阿
全 石年
全 錦洲

時鳥よれば影なきかゝみ哉
生者必滅会者定離百の日も過ぬれとて枕の下に書遣せる
もの石に上せんと後者のはからひぬるもつれつれならず
白菊や只其仮も露の曙
一經

積 愚叟

全 秋 懷旧

手向はや花野の花をそれながら
木犀や手向る伽羅ととも薫り
朝顔の花に置間や露の玉

戸塚 鶏^ツ文^ヰ
全 志得
全 竹圃

逝者不舍昼夜と誠なるかな星の井の辺りなる仙鳥夫人は滑
稽の街に遊ひて風騒の魁たりしか仮の病ひに臥て終に此卯
の花月初の六日時鳥の一声を限りに正命の終りを遂ぬ
月やあらぬ幻もかなほととぎす
螢火の流行衛の水清し
山崎 梅豊
行脚 文重

全

常ならぬ不寒不熱や白かさね
葩に洒水おくらん杜若
感すれば松も散らん音なし琴

金川 似風
全 雪武
全 素道

紫の雲路に床しほととぎす
いつの事かとよ仙鳥うし身まかるよしその友かきの音信
たるに
全

秋懷旧

星の井や覗けと秋の時雨空
散るや牡丹うつゝか夢か夜の蝶
葉桜や其花の香を夢にしも
暁の蓮の香高き手向かな
卯の花の雪吹に寒き袂かな

岩瀬 岩水
浦賀 既白
吾涼
浦山
鍊之

扱はとてそなたへ向けは柳散る
露柱庵 春鴻
芍薬もくねる数なり夕あらし
江戸 成美

麦秋の世話を逃てか彼国へ

江戸 雀角

卯の花にうき事を聞く便哉

全 尚作

仙鳥刀自まかりけるよし聞て驚ぬひととせかの刀自のもと

に蓬雨宗詞とともに舎りはいかひのことなと語りけるを思

ひ出して

佛も清水にうつせ星月夜

江戸 輝牛

去年の卯月仙鳥のうしこなたへわたりたまひてかたミにう

れしと語り合ひ侍りしに此卯月は長き別れと成ぬることの

いとかなしく只夢のやうにたいめの折からの目に残り侍り

て

佛のゆかし袷のうしろつき

古友

全

仙鳥ぬしの名はひさしく聞き侍れといまに面をあはせさる

うちに黄泉の客と成りたまふをいたみて

見ぬうちに牡丹の日教暮れにけり

河上庵同居 一馬

星の井安斎氏仙鳥ぬし卯月六日に往生したまふと藤沢より

しらせけるにうちおとろきて

先へ散る花尊しや芥子皴

泰里

春の部

無事庵 仙鳥

一声は鶴よりうれし初鴉

神風や伊勢という名は飾海老

憎うない風となりけり梅のはな

うくひすや藪に汚れし去年の雪

溝川や氷の下の芹なつな

うつ向て通る人なし風巾

此ころは誰か手も届く柳哉

猫の恋うなるか根問ひこまりけり

淡雪や念なり消て麦の色

納木の二見へ着くや春の風

若艸やうつむけてある藻刈舟

やかて咲く花見残して涅槃哉

燕や一羽戻れは一羽行

いろいろの羽に好ミある胡蝶かな

そほ降るや舞ぬ思ひを啼雲雀

春の月更て糸竹揃ひけり

寝そびれて夜着重き夜啼蛙

春の日や牛も呵らす浜七里

松承庵古友尼の庵を尋て猶其風流をしたひ侍る

幾千代も松を頼みや藤かつら

歛遣ふ人があるしや桃の花

網も釣も入らて女は汐干かな

かならずと桜の文や翌あさて

江の嶋にて

貝尽し並ぶや嶋の家さくら

我が宿近き長谷寺に詣て

咲にけり誓の花の朝さくら

鍋かける松見付たりさくら狩

夏之部

脱く跡の縣竿重し更衣

桜から遊び過して拾かな

卯の花の垣から先へ夜明哉

雁ほとに並へて見たし時鳥

ほととぎす春の心を離れけり

夜松魚や行燈提て井の辺り

橋あらは通ふて見たし杜若

うつほ木と思ひ捨しを若葉哉

都岡崎より蝶夢法師の我草扉を尋たまひけるに

花の後葉にも都の風薫る

花は葉に添ふて牡丹のすハリ哉

閑古鳥あれかと問ハむ人もなし

うま子を愛して

短夜や寝た子を覗く枕麩

ミしか夜に栗蒸すひまの夢も哉

月ひとつ残して戻る田植かな

独子の旅寝おもふよ五月雨

偽のきのふの虹やさつき雨

萍へ逃てはたるのひかりかな

あつき日や風を尋る家の内

水あひに行子を呵る暑さかな

昼顔や朝とゆふへのおもひ草

屏風山かさねかさねて雲の峰

涼にも江戸ハ込合ふ川辺哉

洗濯に誘はれ来たり川すゝみ

夕暮に由井の浜へ出て

網ぬけに魚拾ハはや浦すゝみ
旅人の杖捨てある清水かな

秋 之 部

冷々と寝肌に知りぬ今朝の秋
蘭の香をとめて棒んかし小袖
鳥影の落ると見れば一葉哉
霧や雨戸明れば蚊屋一重
文字摺や手にとる文のひろけ風
土器の料理はかなし魂まつり
稲つまや人をたよりの洗ひ馬
眼に遠く枕に近し虫の声

鎌倉山覽古

城跡やおもひ有けに立案山子
臥て居る栗から起て鶉かな
茸狩や女の目たつ草の中
蝶々の老もめてたき花野哉
朝霧や見るうちふへる舟の數
初雁やはつかに見出す昼の星

待宵やこゝろミなから一夜鮓

平の政子の君御産の御祈とて鶴岡の並木十八丁か間直道を
造られける時秩父とのをはしめ諸侯手つから土石を運び給
ひし事吾妻鏡にも見へたり所謂段かつらは是なりけり今宵の
清光にひとり月に嘯きて昔時を懐ふ

置道に虫を友なる月見かな
名月や鼠の走る塀の上
十六夜や酒を逃たる捨袴
ミと子子の夢見るうちや小夜砧
牛の背に笛の音寒し後の月
老僧の客待顔やきくのはな
歟かした礼は美し菊のはな
山里やまた宵なから鹿の声
秋の夜や枕のものすゝり箱
紅葉して猶白滝の流れかな

冬 之 部

はしり行黒木呼びこむ時雨哉
此夢を誰に語らむ冬こもり

髪切てまた罪深き頭巾かな
いつよりも富士の近さや枯野原

師叟河上庵の尋られて

小座敷ハはいかい客やゑひす講
水の上に寝て見る月や網代守

水仙や阿仏屋敷の霜の朝

麦蒔や日を背負たり抱へたり

咲ぬ木の雪を待間や帰り花

掃捨し藁の袴よけさの霜

寝転へは嘶の絶る巨燧かな

下葉には月の氷や冬木立

千鳥聞て戻るや納屋の小桃灯

初雪は花一輪のころかな

雪の日や槽火にかハく機の粘

吉原の夜廊見むと人にさそハれける道すから

八丁の土手も冷し冬の月

垣結ひの袂を出たかみそさゝる

今こほす水氷けり鉢たゝき

咲梅に恥るや年の塵机

森さひし霜の夜更る神楽歌

美しき紙子着て年を寄せせけり
藤棚へ並へて見たき氷柱かな

節分や茶にさへ福の汲合せ

煤の夜や明けて屏風の山かつら

笑ハれて鏡ふくなりとしの暮

此小冊子のおもむきは

河上庵主の序文に委

ければ爰にいはずはた

亡人若きよりのほく凡

三千句程もありしを

百ばかりも此集の後へに

載侍り題号も只ありの

まゝに卯の花くもりと呼

事しかり

鎌倉里園

雪海誌

鯉鱗吟

□□出て□しまく月の今宵哉

露三尺の草の端垣

□□の鵜梢やかたるらん

かつく羽織も太布の袖

平磯の霰も置かぬ□□かちに

□□にある数の俵物

小嵐のなれて行かふ坂の上

禰宣か娘の扇忘れし

夢の汗浴衣の裾にとはしりて

竿なき船も入□□なれはそ

へなたりは合折の糸目洩やせん

居士号許りし此頃の秋

蒸物の烟に月のさしかゝり

甲斐振おろし雁さはき立

いにしへの累を便に家もては

人なつかしく棋を□□り

散は咲花の日永となりにけり

陽炎かゝる橋の落書

戸明れば二ツの燕飛違谷

米かす鍛治の妻は持すも

横降に時雨し跡の雪に成

葉隠椿色の尖さ

鳥羽玉の暗き思ひを中々に

覚束なくも門の立槓

雲もなき申の下りを南吹

旅笠伏せし青草の上

掌のひらに墨の摺たき哥出来て

甕尽たる月の暁

啼虫の寺瓦葺ものいと古く

野分かまはぬ松二十間

凱陣に鯛の俎板□□へける

金屏洩るゝ鼓小太鼓

なさけなき人に傀儡を後向

恋唄謡ふ馬士の明暮

花の暮連り走る山の犬

散る花

伊豆や相模の春海面

谷

松

鳥

児

応

谷

松

鳥

児

応

谷

松

鳥

児

応

谷

松

鳥

児

松

歳旦春興歳暮

元旦や世に出立の福寿草

福引や雪は潤す家子持

徳は身を潤して実に汁粉かな

天照山内 揚止水

扇カ谷 嘉幸

はつ春の日の出も早し日本橋

見る人も共に笑ふや梅の花

月も日もわれとは行て年暮れぬ

同前 吟風

元朝や鶴を羽をのす初日の出

麗を初音ぞ告る梅ヶ枝

年の尾やもう版手ほど古暦

同前 五霊

名月の面をはつす初日の出

梅ヶ香やはつ音を鳥は配り初め

蓬萊の山も見えたり年の坂

同前 鳳吟

屠蘇かけて福という字で吞始

野も山も化粧くらべや花の春

嬰兒の心うらやむとの暮

雪ノ下 一舟

咲初て御代も豊や福寿草

鶯やまたしおらしき懐子

家々に餅花咲や年のくれ

同前 路原

我が宿の千年を継や門の松

恵方から梅のかおりも嘸や嘸

月々の埃積るや大三十日

坂ノ下 女仙鳥

また今朝の水もかたし初手水

春興

嘶く駒の出で来る霞かな

歳暮

献立に春こそ来たり年の宿

大町 米舍

上戸等も餅を喰う也今朝の春

大町 米舍

春興

万歳や終に笑はぬ人迄も

一筆に花も咲けり栝出め

大尾

大磯鴨立庵

乙艸庵西奴

雪解やかかる都に捨草履

江戸

雪中庵 蓼太

百姓も象碁さすなり春の雨

梅沢梅豊

山崎村

梅沢九左衛門尋庸（ひろつね）山崎村柿原に住んだので柿原舎と称し、俳号を梅豊とした。通称山崎の大梅沢家の分家で、「隠居」とよばれている梅沢家の五代目。

一七五七年（宝暦七）生れ、一八一二年（文化九）に歿した。墓所は山崎池ノ谷共同墓所梅沢家墓地。

九左衛門の頃の山崎村は三人の旗本に分給され、九左衛門は松前氏の領地に属し、名主役をつとめていた。若い頃江戸に遊学し、詩文、漢学、書道を修めて帰村後は、

俳句を春秋庵白雄門の葛三についたといわれている。葛三は大磯鴨立庵五世庵主。

当時の「隠居」梅沢家は豪勢を極めていたことは、九左衛門の伴有実が江戸遊学当時の友人で水戸藩士加藤曳尾庵の紀行文「我衣」のなかに記されている。それによると家の構は、横十六間、奥行十二間（約二百坪）で表門の長屋門は長さ十間もあり、さながら浅草の観音堂のようであった、とおどろいている。

九左衛門の書いたものは、山崎天神境内の碑文、江戸島道の道標二本が現存するが、のびのびした書体である。鎌倉各地に句がのこされている。

逝者不舍昼夜と誠なるかな、星の井の辺りなる仙鳥夫人は、滑稽の街に遊びて風騒の魁と申か、仮の病ひに臥て終に、此卯の花月初の六日、時鳥の一声を限りに正命の終りを遂ぬ月やあらぬ幼もかなほととぎす梅豊（卯の花くもり）

思ひ出し思ひ出し飛ぶ螢かな（山ノ内祇園社掛額）
草の戸や遠山まつ薄霞（鳴の井）
蝶飛や草鞋の売れる山七里（的申集）
すみ渡る雲や田毎の渡し水（江ノ島）

見られけり梅に行人かへる人 (春帖)

煤の夜や家居心の山かつら (〃)

雲あればこそさゆるなりけふの月 (県古俳人展)

釈鏡水 岩瀬村

浄土宗大長寺の十七世住持天阿通達了賢和尚で、文化十年寂の人が、鏡水であると小泉秀夫氏が調べた結果を知らせてくれた。

寂る身の甘蔗は照らせ夜半の月 (卯の花くもり)
飛螢しづめば草に小雨かな (山ノ内祇園社掛額)

亀三 同村

祇園会や母に窺ふよるの衣 (山ノ内祇園社掛額)
歌人に背く山なしけふの月 (県古俳人展)

岩水 同村

祇園会や月も舍れる水遊行 (山ノ内祇園社掛額)
星の井や覗けと秋の時雨空 (卯の花くもり)

完晋 同村

闇動く土橋はいずこ飛わたる (山ノ内祇園社掛額)

谷鳥 同村

散て行花のはまれや花御堂 (卯の花くもり)

古登 大船村

卯の花や薄曇りある星月夜 (卯の花くもり)
見らるゝか見るか出口の柳影 (春帖)

完漁 同村

祇園会の灯や水に明け水に暮れ (山ノ内祇園社掛額)
何れも姓名、生歿年月、その他不明で、この他この村には天保年間に入って多くの俳人が出る。

岩橋了々 山ノ内村

岩橋立德元祥、俳号が了々。一七三七(元文二)生れ、一八一〇年(文化七)歿。和歌、俳諧、書道などの諸芸に達し、門人も育成した。一七八四年(天明四)円覚寺正統庵再建の棟札、一八〇七年(文化四)には山ノ内祇園社掛額に句をのせ、額の筆者であった。

山ノ内の北鎌倉近い同帰墓地内にある墓塔には辞世の歌

いたづらにやそちま近くながらへて

もとし国にいまぞかへりぬ

が刻んであり、また門人たちが師徳を慕って建てた「筆道門葉中建之」と刻んだ碑も建てられている。

入る月の影まぼろしや子規 (卯の花くもり)

一興を宴に追込む螢かな (山ノ内祇園社掛額)

午睡 同村

俯の筆に残りて閑古鳥 (卯の花くもり)

むら螢柳の闇にそびへけり (山ノ内祇園社掛額)

梅の外月に見る樹はなかりけり (県古俳人展)

都良 山ノ内村

汐に入る月幻の卯の垣根 (卯の花くもり)

祇園会や声はる子供の遊びかな (山ノ内祇園社掛額)

義明 梶原村

祇園会や被布薫るみやこ風 (山ノ内祇園社掛額)

宗慶 同村

関取の腕にやさしき螢かな (山ノ内祇園社掛額)

手まぐらの人に科なし春の雨(的申集)

かまきりの身がまへおかし枕の先(句光撰月並集)

調法の川の流れやかきつばた(雪中庵句会)

兩人共姓名、生歿不明であるが、宗慶は天保年間に至っても、作品をものしているが、この期に入れた。

雀角 腰越村

腰越万福寺の住持というが、詳細は不明。俳句は春秋

庵白雄門の鳴立庵五世葛山に師事したといわれているか

ら、梅沢梅豊と同門といえる。果遊軒と名乗っている。

麦秋の世話をさけてか彼国へ(卯の花くもり)

二階から船呼かけて更衣 (百亀遺芳集)

足洗ふところ残して落し水 (県古俳人展)

水に影しばし流るゝ桜哉 (花供養)

ふし見えて時雨のかかる縄手かな(俳諧人名録)

漱流 同村

夏菊の香にもかよはぬそだち哉 (百亀遺芳集)

片町のさくらみ越せし夜釣かな (県古俳人展)

釈小動 同村

卯の花に滴こぼれて手向かな (卯の花くもり)

漁盛 同村

戸開や鶴のいただき見る日和 (百亀遺芳集)

芝之 同村

足柄の雨や落葉のうは迂り (百亀遺芳集)

雀角以外の俳人の詳細は不明。

前記の他に肩書に「鎌倉」とのみ附した俳人が数名、わずかながら作品をのこしているが、ここでは割愛した。

このように十八世紀後半に入って、鎌倉に輩出した俳人たちは、村々の名主か、それに準ずる支配階級、尼僧侶、神官といった知識層に限られ、一般小前百姓と思える者は見当らない。それは小前百姓たちの識字率の低さとか教養の浅さとかいうことでなく、身分階級制の問題でもあった。

俳諧を民衆文芸というが、その民衆は地方における支

配層に属した人々にすぎなかった。芭蕉の門人といってもほとんどが、武士か地方の豪商、名主、庄屋階級で、三都でも豊富な商人たちだった。蕪村にしても似ていた。鎌倉の俳人たちもその例にもれず、高名な俳諧の宗匠を招いて、近隣の同格、同等の上層か知識人が寄って、一座して風雅を染しむといった程度のもので、句集を遺した仙鳥の他に、作品として見るべきものをのこしている、といえる人々は少く、せまい鎌倉地方に五十人にある俳句作者が、この期にいたことだけが注目される事柄である。

この人たちは自分たち仲間だけのたしなみに終始し、それを村々にひろめるだけの寛容さと努力をしていなかった。自己一代の風雅に了って次代へのこすものがないかたともいえよう。

次の十九世紀に入ると、全くの別の世界、小前百姓たちが、村々で俳句の「連(仲間)」をつくり、そうした中から、日常の実生活に根ざした、俳句がつくられ、旦那方の言葉の風雅な遊びと異った平談俗語の句が出てくる。こうした傾向は一般的に評価されず、小前百姓たちの俳句作者の量的増加が、俳句を卑俗低迷にしたと、この期

十九世紀以降を、きめつけているのが俳諧史家たちの言分であるが、一般的にそうであつても、私は鎌倉では俳句を一般小前百姓たちが、つくるようになって裾ひろがりに普及し、そうした中から数は少くても、私たちに佳句を遺してくれたことの意義を、地方史を研究する者の立場から評価したいと思つてゐる。

そのことは俳句の高雅な精神と、深い道を求める本来の姿勢を、否定してよい、というような意味でなく、安易に入つたなから、いくらかの向上を期待することが、大衆化の意味する中に含まれてゐることを言いたいだけのことである。

明治の正岡子規が「天保以後の句は概ね卑俗陳腐にして見るに堪へず。称して月並調といふ」とは『俳諧大要』に述べている言葉で、この時代を代表する俳人の蒼虬、梅室らをはじめ、天保期の作者を難じたものである。

俳諧がこの期に裾ひろがりに一般民衆にひろがつたことは、化・政度という文化爛熟期の影響が全国的にひろがり、識字率が高まつたとともに、俳諧宗匠の、安易な輩出だつた。これは俳諧だけでなく、大した才能や力量のない者が、世の流行に乗じて民衆に迎合することで世

渡りする風潮は、普及という一面とともに反面、厳正を崩すこともある。そのような俳諧宗匠が、この頃多くなつたとは、俳諧史の著者たちが多く認めてゐる。

「やゝもすれば俳諧嚴重なる物と思へり。甚しき心得ちがひなり。文武の道は天下国家の大業なれば、師たる人は嚴重にあらざれば教道行はれがたかるべし。俳諧は世外の小枝なり。徳とするところは和緩なり。世業に牒々たる人も或時は閑を得て詞花の席に情をうつし、心身を慰むるの道なり。殊に我門にては滑稽談笑といひ、又諷練といふ。」と流行舎の匿名で書かれた「霽心志」の一文は、天保十二年に出たもので、俳諧について当時の考え方の一端を代表しているともいえる。芭蕉が「風雅三等の文」で示したものがここでは、俳句を「世外の小枝」と軽く見て風雅の遊びに重点をおいてゐる観があり、忙しい日常生活のなかで、平談俗語で詞花に情をうつすことを人生の楽しみとしてゐる。

天保時代の俳壇の風潮はこのようであつた。

鎌倉では十九世紀に入つてから、上層階級の俳人たちとは別に村々に俳諧の連がつくられるようになった。

連とは俳句の仲間の集まりで、宗匠のもとに定期的に

「月並句会」「運座」をひらく、現代の俳句結社に等しいものである。

「月並句会」は地方の宗匠を招いて、撰句、撰評をもっぱらにしていた。「月並句会」に集るものは、村内か部落内の同好の人たちで、小前百姓たちが主であった。日常気軽に、共通の仕事をし、容易に寄り合える仲間だった。

それが「連」をつくり、楽しみ励みあうようになって、「連」はひろがった。

宗匠として名のある俳人を招くほどの財力はないので、近隣の宗匠が、気軽に招かれていた。藤沢宿の豊女、武蔵国笹下村の古元坊（桜庵）江戸の田喜庵護物、真龍庵などの他に大磯鳴立庵の宗匠らの名が出ている。

「運座」という互選形式の句会を発案した小田原出身の俳人蓑雪庵午心の名も見られる。

鎌倉でこうした俳諧の「連」の名が見られるのは、『文政』句会（一八一九～一八二七）が、小町妙隆寺で催されたときの、催主から各村の「連」に送られた案内書で、表紙共半紙十八丁綴、全句数三七四句を取めたもので、表紙及表紙裏は次のとおり。

表紙

兼題	雁	入花二不及
立秋	礎	衆評之景天五分
衆評	文政句会	地人三分
梶原	風羅連	
関谷	扇ヶ谷連	
諸君中	催主共	

表紙裏

口演

寒氣之御雅君弥御安寧奉賀候、来ル廿一日小町於
妙隆寺評毎開卷、尤衆評之分は御連名不洩抜き句
并景を御添御持参之票ニ仰含、晴雨とも朝五ツ時
より、及披講候間、諸君御賑々數御來臨奉希候

閏霜月中の二日出ス

当日 兼題 梅二句吟

真流庵

外ニ扇角刀興行

出席

文政年間の閏月は二年（四月）五年（正月）七年（八月）十年（六月）十三年（三月）の五度あるが、霜月が閏になつた年はないので、文政の何年であつたかの断定はできないが、この頃、扇ヶ谷、関谷、梶原の村々には、連ができていたことは、歴然としている。風羅連というのは、一ヶ村だけでなく、他の村々の俳人が加わつて、連をつくつていた名ではなからうかと思われる。

このようにして鎌倉では、十九世紀に入つて村々の連を中心にした俳句がさかんになり、月並俳句会や連

座の他に、他村の鎮守の祭礼や行事に事寄せて催される俳句の会に、出句するといったようなもり上りが見られるようになった。

前期の俳人たちが村の上層に属する人々だったため、その氏素性が明かであるのに対して、この期に出てくる人々は小前百姓であるために、一般に姓名や家柄が明かでないものが多い。この調査で、いまの段階では次の通りだが、後日を期したい。

有芳

関谷村

関谷村の名主役をつとめた通称「大街道」の一族が落合谷戸とよばれるあたりに集まっていた。勘右衛門を名のつた人と思えるが、寺の過去帳には芳造と称した人物と同じようにも思えるまぎらわしさがあり、断定はできないが、同姓の虎秋とともに、この期にもっとも活躍した俳人で、地元のみならず、相模各地から武蔵、江戸方面にも作品を遺している。この一族から明治に入つて活躍する落合百川、洗耳らが出る。玉縄地区のこの期の指導的俳人で、虎秋と二人の句集もある。

風しみるかけ歯の跡や桐一葉（句光撰集）

木を樵るは向ふの蛆や呼子鳥 (淡島社献額集)

湖に山の小春のうつりけり (冬季乱題)

親の名を呼ばれて笑ふ頭巾かな (")

庖丁で友を招くや菓喰 (")

菓一把敷て花見る安さかな (春季三題)

董咲くや袖が小鍋を洗ふ跡 (")

濡雨の晴れて咲きけり碎米花 (虎秋・有芳集)

虎秋 関谷村

有芳の一族で伊兵衛。虎造とも称したらしい。生死は

明かでない。

有芳とコンビで各地に活躍した俳人である。

はつ雁に袖かき合はず夜となりぬ(本郷金毘羅社献句)

風筋の水に浮けりけふの月 (旬光選集)

御堂から出て来る手には頭巾かな (冬季乱題)

花董見ながら登る峠かな (春季三題)

長閑さや路たいらげし下駄の跡 (虎秋虎秋集)

客に來た子の手伝ふや若菜摘み (当季三句合)

山道の二筋になる雪解かな (巽荒神献額)

関谷村を中心に玉繩には前記の他に二十数人の「連」

があつて、各地に句をのこしているが、おそらく一般小
前百姓で、俳号だけでは家柄などもつきとめられない。

一雨 関谷村

雪の旅笠も兜の重みかな (冬季乱題)

これまでが海なき里や雉子の鳴く(巽荒神献額)

千山 関谷村

家毀つ跡にけなげや花すみれ (春季三題)

古びたる堂や巢鳥の羽打音 (")

田の畔に下駄ぬきにけり若菜摘み(当季三句合)

淡雪や笹の葉末に水の垂れ (")

燕の羽返し早き夕日かな (春季三題合)

鬼角 関谷村

苗代や日と水との夕明り (日枝社献額)

友からみして蝶舞ふや畑隣 (四季乱題句合)

魚荷とる馬嘶くや桃の花 (")

草市や霞の千ぬ間を亮盛る (")

来るやいなや芸を乙鳥の柱たて (春混題)

落ちついた人の心や春の雨 (当季三題)

静川 関谷村 (冬季乱題)

足引に風起したる落葉哉 (冬季乱題)
枯柳に鳥のふくるる冬日哉 (")

梅志 関谷村 (冬季乱題)

落葉して白糸の瀧目立けり (")
木兎の目も光りけり冬木立 (")

松風もとだえて霞の真昼哉 (春季三題合)
若鮎に餌を撒きゐる橋場哉 (")

眠る子の手から董こぼれけり (")
葉に蠟ろうの流れてゐたる牡丹かな (巽荒神社献句)

蓮糸 関谷村 (春季三題合)

旅人の笠見送るや朝霞 (")
駒の鈴遠く聞けり朝霞 (")

若鮎や柳のふれる水の音 (")
桃咲くや麦のよれ葉のはぐれ時 (")

芦泉 関谷村

さらさらと風の乗り来る落葉哉 (冬季乱題)
初雪に竹の行儀の崩れけり (")

柳絮 関谷村

刈り上げた田に亀遊ぶ小春哉 (冬季乱題)
律気さを笑われつゝ焚く榾火 (")

雉子の戸や門橋越えて爪あがり (冬季三句合)
月落ちて夜半の友なし網代守 (")

他に二、三句だけを見る作者もあるが省略した。

青奴 山ノ内村

山冷を木の間に持て朝の花 (葛三撰四季乱題)
染匂ふ袂に吹くや秋の風 (")

和水 山ノ内村

海面に鴨の動かぬ真昼哉 (白山社献額)
春風の通を走る鉤屑 (巽荒神社献額)

一 秀 山ノ内村

雪の朝宵の椿火の体たらく (白山社献句)

思 雪 山ノ内村

春の海舟漕がぬ日も詠めけり (本郷金毘羅社献額)

一 晴 山ノ内村

人中的日傘をよける日傘かな (巽荒神社献額)

虎 龍 小袋谷村

旅人の真似して行くや田植唄 (巽荒神社献額)

雨もりを戸口にはじく一葉哉 (〃)

梅 史 小袋谷村

雁鳴くや海鳴止んで星の散る (本郷金毘羅社献句)

葉に臘の流れてゐたる牡丹哉 (巽荒神社献額)

登 龍 上町屋村

虫鳴やたぐり寄たる船の綱 (百亀遺芳集)

有明のほかに富士の初霞 (本郷金毘羅社献句)

一 清 腰越村

雨もりを戸口にはじく一葉哉 (巽荒神社献額)

笑 々 腰越村

駒鳥啼や夕日の先の薩多(陀)山 (百亀遺芳集)

よき折を得たる故郷の桜哉 (花供養)

桐 葉 腰越村

笹の葉にさび付照や冬の月 (百亀遺芳集)

竹 好 津村

雨蛙乗つてながるゝ一葉かな (本郷金毘羅社献句)

和 雪 大船村

有明やくらくなる頃ほととぎす (葛三選句)

野のはての霞は遠き畑かな (本郷金毘羅社献句)

米 人 大船村

凧や軒かららびる干菜の音 (白山社献句)

文著 大船村

さびしさを掃き寄せて置く落葉哉 (白山社献句)

雪堂 雪ノ下村

灯ともせば風の見へけり夜の花 (本郷金毘羅社献句)

米府 雪ノ下村

屋形船を出して青柳に吹かれけり (本郷金毘羅社献句)

花盛り興は真中と思ひけり (巽荒神社献額)

竹里 雪ノ下村

白菊や差出した灯の余所になる (本郷金毘羅社献句)

人の行く声の寒き夜明かな (本郷金毘羅社献句)

ふいと出て笠桶霞む浪間かな (")

鎌をもて鹿相にきるや牡若 (葛三選句)

牧土 雪ノ下村

露の身と云ふて誘ふや年忘 (冬季乱題)

一泉 西御門村

わが影とわればかりなり枯野原 (冬季乱題)

種芋の印の上や冬の梅 (")

猪よけの柱に光るや月さゆる (")

話にも風あるものかおこり炭 (")

夕立や蟹の力める砂の上 (巽荒神社掛額)

近よれば音に角ある冬の川 (")

龜淵 扇ヶ谷村

藪に寝た雀のさわぐみぞれ哉 (冬季乱題)

萱子 雪ノ下村

移徒の席あらたなる火鉢哉 (冬季乱題)

柿の木の下に柿見る小家哉 (四季乱題)

千鳥啼くや船からも来る油売り (")

門橋を過て見きれぬ青田かな (")

汲み瀧す田舟の雨や□□ (巽荒神社掛額)

緩歩 扇ヶ谷村

十月や障子を叩く蚕の蠅 (冬季乱題)

ぬくめ鳥月は山端へ別れけり (")

落葉掻く人に問はばや鶴の年 (")

美酔 扇ヶ谷村

松杉のみしづめけり冬の月 (冬季乱題)

煤掃やうせた手紙を読んでゐる (")

雪の鳥植木鉢より並びけり (")

献立の追々を出す牡丹哉 (巽荒神社掛額)

李束 扇ヶ谷村

白鷺の吹かれてゐるや冬田面 (四季乱題)

李さい女 扇ヶ谷村

蓬萊にはや時めくや人ごゝろ (一枚刷物)

寄々ぞり新艘おろす柳かな (")

年の市伊勢同行もおされ行く (")

巽荒神社献句

扇ヶ谷巽荒神社は一八三三年(天保四)に造り替えられ、それを記念して近隣の人々が俳句を献納し、その撰ばれた句が額に納められて一八四三年に社殿に懸けられた。そのなかには前出した地元の俳人を含めて百四十句が彫りこんであり、英勝寺の関係者と思われる人々を含めて地元で三十四人が句を寄せている。

玉川の普請見に行く袷かな 寿泉

草の戸に建込れたり秋の蝶 烏口

最う散るところと見に行よ花わしみ //

袂をもつ身の涼しさよ松の風 鷺山

不断には歩行越し川や時鳥 //

銭亀を浮せてさわぐ涼かな 鬼向

掌に雫となりぬ春の雪 雨丈

井戸替の済で帯とく小萩かな 本戸 離翠

碁盤にもさすや日暮の梅明り 嶋主

やすやすと寝るや二日の氷室守 //

これが連れと瓢見せけり花の山 本戸 里米

芝の子の芝踏みに出る霞かな 錦車

能き山を抱えし家の冬の梅 竹雨

横に雨見て行く夏の野中哉

〃

田鶴見 長谷村

餅搗てまつた甲斐なし雨の月

(百亀選芳集)

こどもまた負じと焚火送り火

(相模風流)

素兆

又逢ふにしてさへ月の名残哉

(百亀遺芳集)

英秋 坂ノ下村

雪降て母に朝寝をすすめけり

(白山社猷額)

梅兄 山崎村

五位鷲の月を見送る朝の声

(百亀遺芳集)

何れも姓名、生没、その他家柄、身分や生活に関して
知ることができないが、前に記したように、村の上層に
属する人たちでなかったことは明か、扇ヶ谷の場合で
も主権者に名主階級は見当らず、中堅クラスを中心に村
をリードする立場の名が見られる。これまで紹介した他
に村名のはっきりしない、肩書に鎌倉とだけ記している

俳人が三十余人あり句数も数十に達しているので、この
期の鎌倉の俳句人口の並ならぬ普及を思わせられた。

この期も十九世紀も後半に入ると、俳人の活動が目立っ
て減るのは、幕末の動乱に当り、江戸に近く、而も東海
道宿の助郷、伝馬の強化や海防に備えて知行地の領主入
れ替えのはげしさなど世事の匆忙だけでなく、稀有の飢
饉、暴風雨などの自然災害の続出が、民衆から心の安定
と時間をうばって、「連」の活動に歯止めをかけていた
と思える。

一九六八年江戸幕府が大政奉還して、明治新政府が出
現して、世情ようやくととのって来る兆が見える十九世
紀末になると、この期に活躍した俳人たちで老年期に入っ
た人々が動き出し、新に加わった人たちとともに、村々
に、「連」がつくられ、明治の賑やかな時期に入る。こ
うして鎌倉は二十世紀に入っても、いわゆる「月並俳句」
がさかんで、正岡子規らの提唱した新傾向俳句の、日脚
がのびて来るのは、二十世紀の二十年代、大正に入って
からになるのだった。

使用した資料のおもなものは

鎌倉の絵巻 鎌倉国宝館刊

鎌倉近世史料―長谷・坂ノ下 市文化財保護課刊

卯の花くもり 富山県立図書館所蔵

的申集 県文化資料館所蔵

俳諧史 栗山理一

俳諧大辞典 明治書院

山ノ内「八雲神仕掲額」

扇ヶ谷「巽荒神社掲額」

文化十年

天保十四年

鎌倉市中央図書館所蔵

(木村彦三郎寄贈)

当季三句合下詠草

天保

淡島社奉額披露句会

天保

玉繩スワ社永代奉額句会

天保

四季乱題句会(鳴立庵葛三)

天保

此はしら立(い山坊)

文政

月並九月(葛露庵句光)

天保

冬季乱題句会(清墨庵)

天保

春季三題合詠草

天保

妙隆寺句会清記

文政

夏季混題、古元坊

天保

無題(古元坊)

天保

花昌亭百亀遺芳集

天保

秋句集

天保

文久五百題

文久

雪中庵夏の配りもの

天保九年

鎌倉の俳人（明治時代）

ここは年代順を追うのは、無理があるので、俳号の五十音順に配列した。

哀花 鎌倉

雪降るや洞に友呼ぶ猿の声

（清風追悼）

名月や何煙りおる磯の家

（〃）

青奴 山ノ内

勝上軒と名のつていた。

染匂ふ袂に吹くや秋の風

（四季乱題）

荒磯や碎けてはまた元の月

（清風追悼）

唐崎の松に音なく春の雨

（〃）

一貫 鎌倉

咲かかる花や雲さえ濃き薄き

（清風追悼）

一境 雪ノ下

珍しき話もち寄る囲炉裏哉

（日枝社）

新蕎麦や客をそらせぬ強上手

（永谷天満）

取て箆の工夫やはつ螢

（飯田八幡）

さればとて寝てもしまえず秋の暮

（日枝社）

歩行ほど重みのつかぬ傘の雪

（清風追悼）

一山房 鎌倉

面オチ白き形撰り出しぬ小殿原

（亀井野）

一清 腰越

世渡りの風も友なり鉢叩き

（亀井野）

一井 雪ノ下

絀井が姓

出たひの程にくもるや花の山

（清風追悼）

川舟や夢のうへなる雲の嶺

（亀井野）

茶を淹れる隙な手も煤払い

（〃）

新蕎麦や頓て打人も客となる

（〃）

身についた癖はかくせぬ頭布かな（上行寺）

跡先に鶯聞て峠こし

(四季乱題句合)

一葉 台

葉山景次郎、台の賞月庵高月についた。

一 醉 台

来た朝の嬉しさ鶯啼かずとも

雪ちらり折て春も後もどり

兄の名は梅に譲りて太郎月

一 泉 西御門

わが影とわればかりなり枯野原 (四季乱題)

ひとりでに尾花散る日の寒さかな (〃)

噂にもかげさしいるや月の夜 (清風追悼)

右 近 関谷

江戸時代には名主役をつとめたこともある家で、名は

太平衛、村の代議員から、玉繩村会議員などをしたこと

もある。藤沢で発行した句誌「霸王樹」の会員にもなっ

てた。

手送りに日和積込む年木哉

(四季乱題)

烏 囀 台

初雛や能き夢覚めて笑ふ頃

不二晴れの関八州の弥生哉

春なれや雲と花の散る風情

蝶舞ふや花となる木の梢より

風高く男波女浪の磯を打つ

鉄砲の響になれて蛙かな

花 艶 台

友だちのほしき思いや今朝の雪

(清風追悼)

可月

落ちついた山の姿や秋の暮

(清風追悼)

鶴山

雪ノ下

富田省三。鶴ヶ岡八幡宮三ノ鳥居北角に旅館を営んでいた。「角正」こと「対鶴樓」の主人。通称庄左衛門。

もとは鶴ヶ岡八幡宮の八乙女として奉仕していた富田王部から十五代目といわれている。各地の俳人と交わり、旅が好きで逸話ものこり、庚申塔を建てたり、寿福寺に祖廟をつくり、銘文を書いている。作品も多い。

黄昏に重る寂や秋のかね

(都筑川八幡)

着る頃は夜の明てあり夏ふとん

(泉山追悼)

鬼灯や短気は物の破れから

(〃)

何事も人に習ふや雪の道

(清風追悼)

出代や寝た子にまでもいとま乞

(亀井野)

色は皆松に譲りて冬木立

(とし籠)

猫暑うつしたり降らずに過た空

(香分倉)

田の宮の昼の灯しや種卸氏

(松原庵追悼)

世の中やこぼるる露に昇る露

(円位忌)

支度ほど遠くに行かぬ雪見哉

(四季乱題)

荷風

関谷

鹿鳴や寝返る方は二月堂

(四季乱題)

一葉起きふれ葉起して霞晴る

(〃)

常は居ぬ庵の主や桜草

(〃)

亀井女

台

紙雛や誰が戯れに花のかげ

(庚寅春)

(庚寅春は明治二十三年になる)

緩歩

扇ガ谷

十月や障子を叩く蚕の蠅

(冬季乱題)

ぬくめ鳥月は山端へ別れけり

(〃)

落葉掻く人に問わばや鶴の年

(〃)

龜淵

扇ガ谷

藪に寝た雀のさわぐみぞれ哉

(冬季乱題)

せきれいの尾に一寸さす夕日かな

(〃)

千鳥啼くや船からも来る油売り

(〃)

其山 関谷

半散る木の葉日増しに坊淋し
(半僧坊献句)

張り上げし傘の匂いや菊日和
(小動社献句)

みは沼に声の澄たる田螺かな
(景取社献句)

炉開や事足り顔の客まうけ
(日枝社献灯)

此照りにめげぬ色香や百日紅
(〃)

青麦や見渡す果は富士筑波
(〃)

忘れたる頭布や二度の暇乞い
(新歳会)

喜蝶

面白ふ影浮沈む浪の月
(清風追悼)

漁舟 鎌倉

白酒やはにかむ袖の薄桜
(小動社献句)

夢になる嘶か末の置炬燵
(日枝社献灯)

茸かりや咄してみれば同じ山
(泉山追悼)

親の手をはなれて高し年の坂
(〃)

玉澗 鎌倉

へなてりも啼か六浦の隴月
(庚寅春)

圭頭 山ノ内

雨催ふ三崎の月や郭公
(小動社献句)

葉がくれは鬼も見残す実梅哉
(永谷天満献句)

高月 台

山ノ井高次郎。一八五六年(安政三)七月二三日生、

一九三二年(昭和七)三月一日歿。

若くから俳句に親しみ、関谷の落合百川らと交り、
九一一(明治四四)立机して賞月庵高月と号した。県下
にひろく俳友をもち、句作も多く、地元にも多くの俳句作
者を育てた。

うすくとも心の厚し掛布団

枯尾花風も骨もありそうに吹く

朝寒やまだゆき丈の合はぬ衣

花咲て散出す人の心哉

むめ咲や飛々歩行く日影みち

笑はれて又寝直るやはるの雨

足腰も新酒に力取られけり

下萌や匂ひそめたる朝の風

四方山の嘶も尽きず春の宵

鶯に遠慮しにけり朝掃除

良薬の根のみ残りける焼野原

初書や寿長く走り筆

雨雲に月の宿して鳴くかわず

青白く雲棚引くや春の不二

麦畑を余所に見て舞ふ胡蝶かな

嵩牛 台

世わすれに山野は雉子啼ふもとかな (庚寅春)

耕山 山ノ内

五月雨や水の尾を引三井寺 (小動社献句)

鶴の背に足らぬ小松も霞けり (永谷天満献句)

寝よと鐘のあくまゝならず納涼台 (〃)

水溜て橋の高きよ冬の月 (〃)

幸甫 鎌倉

穏やかな雲の動きや月の空 (清風追悼)

五龍 鎌倉

杜若世にへつらはぬ栖かな (雪中庵選評)

左由 鎌倉

風呂焚て置と出けり雪見哉 (清風追悼)

三夕 雪ノ下

水見ねば寝れぬ夏の夜となりぬ (雪中庵選)

紫紅 鎌倉

輪かぎりの往たり来たり渡し舟 (丑の春)

慈照 鎌倉

鴨立し跡やがっくり日の暮るる (小動社献句)

思雪 山ノ内

春の海舟漕がぬ日も詠めけり

(本郷上野 金毘羅社奉頌)

寿岳 山崎

山吹きや散れば流るる咲所 (とし篋)

柳吹く風とて別になかりけり (〃〃)

秋風の出処見たり真葛原 (賞月庵立机)

寿月 大倉

皆酒になるや時雨の渡し舟 (橘社献句)

松花 鎌倉

折かねて花に心を折られけり (清風追悼)

寿神 山ノ内

余所に眼のうつる物なし雪の朝 (清風追悼)
虫くいも数のうちなり計り粟 (四季乱台句会)

湘湖 雪ノ下

争ふた跡に念なし雪磔 (清風追悼)

寿漂 長谷

たるるほど松に雫や月のやど (清風追悼)

如烟 腰越

波うつらうつら眠たし霞む海 (藤沢白旗社献句)

松寿 岡本

うしの背に旅もして見る春野哉 (矢部八幡献句)
牡丹見るうちに二度鳴る時計哉 (泉山追悼)

除夜の風呂こぼせば春に流れけり (賞日庵立机)

湘山 雪ノ下

大石平左衛門。一八六四年(元治元)生れ、一九二六

白雨や砂に粒立つ由比ガ浜 (福来舎献句)

(大正一五)三月十六日歿。墓所は材木座蓮乘院

夕暮や日傘帆にして渡し舟 (泉山追悼)

大石家は源氏の侍大将和田義盛の子孫と伝えられ、一

五九二年（文保元）徳川家康のとき、大石若王が鶴岡八幡宮の八乙女として、八幡前に屋敷を与えられて以来、同所に定着、旅館を営み、本陣と称せられた。平左衛門は県立鎌倉師範の職員をしたり、鎌倉郵便局長などをつとめ、親戚の星野天知と協力して鎌倉女学校を創設し、校長に田辺新之助を迎える基礎をなした。

十九世紀半、長州山口藩士で藩史に通じ、藩政の実力者村田清風が、大江、毛利の墓所整備のため来鎌し、本陣大石に滞留したことを記念し、一八九二年清風追悼の俳句大会を主催し、山口県はじめ全国から百名を越す参加者があり、毛利家墓所前に清風の句碑を建てた。
かく身をば持たじ月の風呂上り（清風追悼）

青山 鎌倉

さくほどに曇りも深し花の奥（清風追悼）

井泉 腰越

春潮や開け広げたる大戸先（清風追悼）
人声の残りし山に春の月（亀井野）
流れ来る和光の座や御祓川（〃）

世に鬼はないと渡るや鉢叩き（〃）
朝寒や岩から湧きし湯の煙（〃）
鎌倉は夢の跡なり御難餅（上正寺）
来た人の戻ればさびし盆灯笼（泉山追悼）
麦時やふえしと思ふ野のからす（上正寺）

青楓 関谷

戦勝の旗ひらひらと春の風（旅順陥落視）

春風に園遊会のレディ哉
春風や戦勝国の船をろし
気まかせに探る名勝や春の風
紅梅や順礼のぞく冠木門

静川 関谷

足引に風起しる落葉哉（冬季乱題）

枯柳に鳥のふくるる冬日哉（〃）

井泉 腰越

親竹に雫ゆるやことし竹（日枝社献句）
瓢からつぐ冷酒やはるの味（藤沢白旗社献句）

雪堂 雪ノ下

灯ともせば風の見へけり夜の花（本郷金毘羅社献句）

水色を見競べて居る白魚かな（ ）

新しい程置かねる扇かな（ ）

雪楼 鎌倉

芦をうつ吹かけ雨やほととぎす（今里八幡献句）

庇をうつ吹かけ雨やほととぎす（春季乱題句会）

たづね見る花に粟津や青嵐（ ）

洗耳 関谷

落合与之助。一八五七年（安政四）生れ、一九三二年

（昭和六）三月一九日歿。七四才。墓所は関谷。大街道

落合家の当主。

木犀や手向くる香と友薫り（四季乱題句会）

耳にしみる晝鐘や時鳥（ ）

千山 関谷

家毀つ跡にけなげや春すみれ（春季三題合）

古びたる堂や巢鳥の波打音（ ）

田の畔に下駄ぬきにけり若菜摘み（当季三句合）

淡雪や笹の葉末に水の垂れ（ ）

手打んとしては過行く若葉山

夜はそつと明て静かな白牡丹（日枝社献句）

家ちらりほらり野梅のさかり哉（白旗社献句）

たらちねと手向と高き灯笼哉（矢部八幡献句）

仙喬 関谷

妻も出て掃ふや雪のもどり馬（清風追悼）

明日は見る都の月や駒迎え（四季乱題句会）

今日の月船は売り切れ申候（泉山追悼）

正月を取越す傘や市の雨（諏訪社献額）

除夜をききながら掃けり昼の粉（ ）

泉友 鎌倉

さればとて寝惜しむ月の戸口哉 (清風追悼)

泉里 台

小野田源十郎。一八七三年(明治六)台村の生れ、一九五九年(昭和三十四)歿。

台村の俳人賞月庵高月(山ノ井高次郎)から俳諧の手ほどきをうけた。高月の門弟のうちで泉里だけが、大正七年に立机して、漱石庵泉里と名のる宗匠になった。台の鎮守「稻荷社」の参道入口にちかく、その記念の句碑がある。

露ふんで行くや鎮守の朝詣 (漱石庵主人)

遺作は二千句に及ぶといわれている。

けふも又笑ひに暮れて春の宵

頼まれて本意なき花の留守居哉

暖かになるや降る度晴るゝ度

むざんやな花の盛りを雨嵐

鶯や雨は降ても暖い朝

花の□愈々高ふ香りけり

川柳 関谷

鶏頭のはこり洗ふや朝の雨 (四季乱題句合)

気任せに花足袋連や風呂帰り (〃)

不自由も干菜に足りぬ一ツ家 (〃)

待つ程に濁りのきへぬ清水哉

待人に粟津暮けり春の月 (春季乱題句合)

宗慶 梶原

調法な川の流れやかきつばた (雪中庵選句)

かまぎりの身がまへおかし杖の先 (葛露庵句光選句)

鶯や植たばかりの竹二本 (百亀遺芳集)

漱流 腰越

釣竿の先から出たり夏の月 (景取社献句)

素人 腰越

上田伝左衛門。生歿不明、墓所は腰越三丁目の観音堂墓地。

腰越村収入役をつとめた。腰越の俳句作者の中心的存在で、結社「小動連」をつくっていた。明治二五年に小

冊子「小動」を発行している。

祇園会や連れの手をひく人の浪 (小動社献句)

余念なく明の疲れに寝る子哉 (〃〃)

松を吹く余りの風のかほりけり (〃〃)

吹く風長くといはず花七日 (短冊)

竹好 津村

雨蛙乗ってながるる一葉かな

(本郷上野金毘羅社献句)

竹寿 大倉

井に戻す釣瓶の魚や雲の峰 (橘社献句)

竹塘 鎌倉

居崩して冷たる月のむしろ哉

竹仙 植木

中村竹仙。玉繩村植木の人。村会議員をつとめたこと

もあり、その子の竹葉は大正時代に俳句をよくした。

依編て兼て留守居の鳴子哉 (賞月庵立机)

打水や松をはなれし峰の月 (〃〃)

藤棚や白蛇まつる池の島 (〃〃)

苔剥て碑の名をよむや夏木立 (白旗社献句)

菊主や鶴より白き髪の艶 (福来舎選句)

菊畑や手なれぬ鎌の遣ひおり (〃〃)

肩をふり背をふりのすや奴風 (泉山追悼)

寒い顔揃へて待つや渡し舟 (〃〃)

春雨や障子抜たる豆鉄砲 (白旗社献句)

風呂焚きに一人はもどる田植哉 (福来舎選句)

隣から唄尻をとる田植哉 (〃〃)

竹里 雪ノ下

人の行く声の寒き夜明け哉 (本郷上野金毘羅社献句)

茶好 鎌倉

聞かせたい人は留守なりほととぎす (鷲茶屋)

茶友 鎌倉

かたびらになりて聞けり昼の鐘（矢部八幡社献句）

涼しさや寝酒済んでも寝に行けぬ（〃）

鎌をもて龜相にきるや杜若（雪中庵選句）

貞一 鎌倉

鬼まではねたは月のむしろかな（清風追悼）

庭花 鎌倉
明月や何煙りおる磯の家（清風追悼）

中舎 鎌倉

月々や棚田へ落ちる水の音（清風追悼）

参りする諏訪の山やほととぎす（白旗社献句）

これほどの月夜と知らず柿の花（上正寺）

天月 長谷

野も山もいはせぬ雪のけしき哉（清風追悼）

朝花 山ノ内

岩橋朝太郎。生歿不明。

十九世紀はじめに活躍した了々の家系で地元の世話役

としてはたらいている。明治十九年二月に鴨立庵松宇宗

匠を招いて、家本亭で大会を開き主催者となった。

朝晴の見ゆる山根や鳴雉子（四季乱題句合）

豊三 小袋谷

落ちついて見ゆる花の朝しめり（清風追悼）

陶丘 飯田社納額

住江に風さらさらわたる句かな

春かさに気も眩し麦の色

丹精の梅咲にけり年の暮

長溪 長谷

夜やふけし雪に寝返る竹の音（清風追悼）

東照 鎌倉

淋しさを纏めて撞くか秋の鐘（飯田社納額）

二 竹 鎌倉

鐘の音を包む上野の若葉哉 (今里八幡社)

信房 台

御鏡に映るや庭の花あかり (清風追悼)

粧ひの日毎につきぬ龍田姫 (四季乱題句合)

楳子 雪ノ下

なつかしき空に澄みけり今日の月 (清風追悼)

巽荒神社にも献句あり

楳社 鎌倉

松葉より軽く浮きけり水鳥 (矢部八幡献句)

卯の花や日和癖なる朝曇り (〃)

柏水 腰越

葬や親の代から預かり地 (鷺茶屋)

博透 腰越

雲行を見せた斗りや雲の果 (小動社献句)

白 湾 腰越

仁と義は人の要ぞ白扇 (景取社献句)

梅ヶ香や恥じをとらぬも歌の徳 (新歳会)

石文も苔に埋みて花重 (〃)

百川 関谷

落合六郎兵衛。一八三五年(天保六)生れ、一九二三年(大正一二)一月一九日歿。八八才。墓所は関谷長谷戸。

大街道落合家の当主で、虎秋、有芳のあとをついでの人。幕末の関谷村の名主、明治になって村の諸役をとめ、日記をのこしている。

県下各地の俳句作者たちと交わり、句作も多く、日記の中にも横浜の佐助坊一祐を訪ねた条があり、遺作も多い。

水で顔洗ふ気になる霞かな (亀井野)

米積んで麦食う家や飴り白 (〃)

親子とも黄昏にもどりて年の暮 (とし籠)

蚊の中へ角ふりこむや放牛 (今里八幡献句)

霞掃て墨打ち直す丸太哉 (賞月庵立机)

餅つきの竈かまどに盛し清め塩

(")

晒井や隣をかりて茶の支度

(")

乳貰ひの来て手替の田植哉

(日枝社献句)

花の香や行き来の人の袖袂

(清風追悼)

月にしてよき足どりや戻り馬

(")

蝙蝠や夜網の連を誘引門

(小動社献句)

撫子にさすや化粧の余り水

(")

涼しさや柱離るゝれん聯の音

(香分舎)

小春日や洗ひ髪干す嵯峨の神子

(四季乱題句合)

田螺鳴程伸きし日の長さ

(大街道日記)

重着を忘れ田螺鳴く夜哉

(")

夜着重し重しと田螺鳴く夜哉

(")

田螺鳴く中を雨降る夜の闇かな

(")

嬉しさに聞や夜雨を鳴く田螺

(")

霜降りし夜半を田螺の鳴くのも

(")

ころころと田螺のなり出し夜闇哉

(春季乱句合)

唐崎の雨を啼き合う蛙かな

(春季乱句合)

子供から先に乗りけり花見舟

(")

摘草や児にもたせたる笊ひとつ

(")

米人 大船

功おしむ手のひゆるるなりかきつばた(雪中庵句会)

米府 雪ノ下

屋形船を出て青柳に吹かれけり(本郷金毘羅社献額)

白菊や差出した灯の余所になる (")

ふいと出て笥桶霞む浪間かな (")

碧水 鎌倉

積むゆきや竹に力を添える風 (清風追悼)

逢泉 鎌倉

旭さす不二をむかふに蝶の舞 (庚寅春)

芳山 関谷

我が裏も人の来て摘む若菜哉 (当季三句合)

補屋 岡本

玉城舎を名のっているが、姓名は不明。関屋の俳人たちと交際、扇面、配りものなどにも補屋の名をいれてい

る。江戸から明治にかけての俳人。

搗かけた白其儘に年の市 (玉繩諏訪社献額)

跡もなく更けて行く除夜の鐘 (〃〃)

ひとつつつ気のゆるまるや除夜の鐘 (〃〃)

事もなく更して除夜の掃除かな (〃〃)

出るを待つ宵は過ぎけり除夜の風呂 (〃〃)

初空や暗まで経ちし草の世と (〃〃)

はつ空や帆柱太き四方の海 (〃〃)

はつ空や都統きの草の径 (〃〃)

一つづつ葉掃き寄せる柳かな (〃〃)

新しき水の流るる柳哉 (〃〃)

雨に伸び風にも伸びる柳哉

鶯に宿を借られて寝兼ける

鶯や依怙ひぬきない竹の庵

送り火や月は素より丸い物 (自選集)

不揃ひの草の戸口や魂まつり (〃〃)

百万の其たからより玉椿 (〃〃)

真黒な空から雪の白さかな (清風追悼)

花手紙ひらいて夜すがらねぶられず (四季乱題句合)

(〃〃)

牧土 雪ノ下

露の身と云ふて誘ふや年忘 (冬季乱題)

種芋の印の上や冬の梅 (〃〃)

花守の家に吹込む落葉哉 (〃〃)

猪よけの柱の光るや月さゆる (〃〃)

遠里の間近く見ゆる枯野哉 (〃〃)

話にも風あるものかおこり炭 (〃〃)

近よれば音に角あり冬の川 (〃〃)

夢休 鎌倉

茶旅籠も所望や宇治の月今宵 (賞月庵立机)

春雨や暮敵へ遣る果し状 (〃〃)

草萌えもなびかぬはなし御代の春 (〃〃)

桃太郎 腰越

珠数の輪をくぐらせ鳥放しけり (日枝社献句)

松風に灯とられて夏の月 (〃〃)

遊雅 雪ノ下

大沢專輔。文禄二年(一五九三)徳川家康から、屋敷

をたまわつた八乙女の一人。大沢宮王の子孫である。墓所は浄妙寺。

松になき夜の明ぶりや花の山 (清風追悼)

友月 山ノ内

一つでも光る土産やはつ蛸 (福来社選句)

遊歩 鎌倉

乳貰ひや昼寝の邪魔を詫て行く (日枝社献句)

たのしみも涼しこと雪月舟 (四季乱題句合)

目の欲もはなれて眠し花の中 (〃)

釋したまゝ眠る蛋の宿 (〃)

里鳥 鎌倉

蓋とりて井に降らせば栗の花 (今里八幡献句)

里京 台

岩崎姓。賞月庵高月に俳句を学んだ。

鶯や我家ながらもしのび足

鐘の音も長ふ響くや夕かすみ

児にゆずる親の欠伸や春の雨

後向いて舞ふや花見の戻り船

春風や流るゝままの都どり

まだ山の帯には足らず初霞

初霞胡蝶の産れ出る日哉

松ケ枝に鶴の居据る春日哉

舞ふ蝶の外に影なき広野哉

柳絮 関谷

刈り上げた田に亀遊ぶ小春哉 (冬季乱題)

律義さを笑はれつゝ焚く楯火 (〃)

雉子啼くや花に賑はふ山と山 (四季乱題句合)

雉子の戸や門橋越て瓜あがり (〃)

月落て夜半の友なし網代守 (〃)

雪の峰世界は水の器かな (〃)

蓮糸 関谷

旅人の笠見送るや朝霞 (春季三題句合)

四方も八方もまた色づきて霞かな (〃)

燕来て人の心も寛みけり (〃)

駒の鈴遠く聞けり朝霞

(")

若鮎や柳のふれる水の音

(")

世を捨てし身にも寒さは寒さかな

(")

桃咲くや麦のよれ葉のほぐれ時

(")

蓮子

雪の下

移従の席あらたな火鉢哉

(冬季乱題)

柿の木の下に柿見る小家哉

(四季乱題句合)

門橋を過て見きれぬ青田かな

(")

鎌州

関谷

虫干や世の無事見ゆる太刀の錆

(日枝社献句)

松に野をゆずりて枯る芒かな

(")

芦泉

関谷

啼きそいな雉子羽音や小春風

(冬季乱題)

さらさらと風の乗り来る落葉哉

(")

散り残る若葉は花か小春空

(")

初雪に竹の行儀の崩れけり

(")

露翠

台

招かれて五里夢中なり花の山

和雪

大船

有明やくらくなる頃ほととぎす

(雪中庵選句)

野のはての霞に遠き畑かな

(本郷金毘羅社献句)

資料

鎌倉市中央図書館所蔵
(木村彦三郎寄贈)

百題百句選句集	明三八	木版	諏訪社奉灯秋季混題句集・福来	明
春混題発句	明五		藤沢白旗社他奉額秋句会	明
旅順陥落祝勝集・一事庵	明三八		円位忌「洵稜の清水」・鳴立庵	明二〇
四季雜題句集・福来舍	明		橘樹社永代奉額句集	明七
冬季句集・佐助坊	明	活字	浦迺苦家新むら披露・玄林堂	明
冬題句集・一事庵	明	活字	矢部八幡、坂本第六天奉額句合	明十一
初花集・一事庵	明		龍マツチ辰年記念句集・清灯社	明三七
半僧坊永代奉額句集	明二六	活字	年籠り冬春混題句合・十時庵	明
四季乱題句合・十時庵	明		まつのゆかり・横浜旧話会	明二八
白旗社奉灯句集・三昧庵	明		都田村八幡社献額句集・利久	明二二
四季俳句・狂句集・海光山人	明三四		句寄書帖(仮題)・雲林堂	明
湖十句帖	明		賞月庵立机披露句集	明四四
四季混題句集・松月庵他	明	活字	亀井野・かつら	明二二
琴平社奉灯句会	明二二	木版	村田清風追悼掛額	明二三
四季混題句集・福来舍	明二二		飯田神社他掛額句集	明二六
			上行寺千手院奉額句集	明二〇
			藤沢共楽会月並集・春湖	明四三
			松原庵・桜庵追福句集	明
				活字

永谷天満永代春額句集	明	活字	
春季乱題句合	明		
藤沢共楽会月並集・百川	明		日枝社奉灯句集・福来舍
盆灯籠句集・福来舍	明		俳句番附・山ノ内
運座巻・南里	明		明十九
小動神社奉灯並連名披露	明二七	木版	
大山阿夫利社奉灯句合	明十九	木版	
福来舍喜寿祝賀集	明三五	木版	
新歳会	明	活字	
景取社奉額句集	明	活字	
延寿庵・吉田樓掛額句集	明	木版	
恵比寿樓泉山居士追福句集	明三九	活字	
白旗・諏訪両社奉額句集	明三六	木版	
年ごもり・十時庵	明二二	木版	
盆灯籠句集・玉城舍	明		
みなつき集	明		
四季雜題句集・福来舍	明		
春季混題句集・福来舍	明		

あとがき

「鎌倉の俳人」は雑誌「鎌倉」20号、54号に発表したものに加筆し、「鎌倉近代史資料集」（手耕本）としてまとめた。そして今度の出版にあたり、更に追加、訂正を加えた。ここに至るまで、鹿兒島達雄氏、小泉秀夫氏らをはじめ多くの助力を得たので、深く謝意を表す。

平成三年十月

鎌倉近代史資料第六集

鎌倉の俳人 江戸～明治

発行日 平成三年十二月二十四日

編集者 木村彦三郎

発行人 鎌倉市教育委員会

鎌倉市中央図書館

印刷人 (有) 中央印刷